

学生参加型地域マネジメントの可能性に関する研究

藤崎大河* ・ 安武敦子**

Possibility of Regional Management with the Participation of Student

by

Taiga FUJISAKI* and Atsuko YASUTAKE**

The purpose of this study is to clarify the current state of regional exchange activity by students and to propose effective means to promote communication. Half of the students don't interact with the community, but they're more interested in regional exchange. Casualness is important in the way students interact with the community, and it is useful that the hub coordinate the relationship between the community and the students.

Key Words: Students, Regional Exchange, Regional Revitalization, Area Management, Community

1 はじめに

1-1. 研究背景と目的

地域コミュニティは、防犯や高齢者・子供といった弱者の見守りだけでなく、災害時の住民の安否確認、救助活動、避難所の運営等に重要な役割を果たしている。日本 NPO 学会が東日本大震災の被災者に対して行った調査では、自治会や町内会等の地縁活動への参加頻度が高いほど、震災時に支援者として活動した比率（支援者比率）も支援を受けた比率（受援者比率）も高いという結果になった¹⁾。

しかし現在、少子高齢化や人口流出に加え、インターネットの普及により若者と地域との関係の希薄化が進むことで、地域コミュニティの機能が失われつつある。普段の生活の安全性を保つためにも、また将来発生するであろう災害時のためにも、若者と地域との関係を深め、地域コミュニティを維持していくことが求められる。

そこで本研究では、学生の地域交流の現状や意識について調査することで課題を明らかにするとともに、学生の地域交流を促す有効な手段を提案することを目的とする。

1-2. 研究の位置づけ

学生の地域参加についての研究には、「大学生のコミュニティ参加に関する研究」²⁾や、「地域社会における大学生と地域住民の交流の可能性に関する研究」³⁾といったものがある。

既往研究はいずれも、地方都市での大学生と地域住

民の関わり方、相互の意識について調査しており、結果として、挨拶程度の交流は自然と発生しているが自治会や地域活動に参加する機会がほとんどないこと、その一方で地域住民は学生を受け入れる意識を持っていることが明らかにされ、交流促進には学生からの働きかけが必要であるとの見解に至っていた。しかし、学生の働きかけを促すために必要な要素の抽出や、具体的な提案は行われていない。

1-3. 調査方法

学生の地域交流の現状や意識について、2019年10月から翌年の1月にかけて、全国の大学生・大学院生96名に対してwebアンケート調査を行った。

次にボランティア活動を通じた交流について、学生のボランティア活動を支援する長崎大学の「やってみゅーでスク」^{注1)}平成30年度事業報告書を元に、依頼内容を分類しそれぞれの件数や学生の充足率について分析した。

学生から地域へ働きかけた先行事例として空き家や空き地の活用を通じたものに注目し、全国の空き家活用事例8件、空き地活用事例4件について各団体のHPや取材記事、SNSを参考に地域との協力関係を調べ、特に地域との関わりが深いものについて交流の様子を詳細に調べた。また、学生が地域のイベントに多数参加している長崎市南山手地区において、2019年10月に「斜面地・空き家活用団体つくる」代表の岩本氏^{注2)}と、地域住民3名、2019年12月に学生メンバー3名に対してヒアリング調査を行った。さらに、2020年4月

令和2年12月21日受理

* 工学研究科 (Graduate School of Engineering)

** システム科学部門 (Division of System Science)

から 12 月にかけて、長崎市坂本町にある空き家を改修した「CRANE」^{注3)}と隣接する空き地を利用しながら地域と学生の交流促進を図り、並行して坂本町の山王自治会において定期的に（月に1回程度）班長会等に参加し、参与観察とヒアリング調査を行った。

2. 学生の地域交流の状況と意識

具体的な交流の項目について、小学校から現在に至るまであてはまるものを選択してもらった(図1)。どの交流内容を見ても小学校から大学にかけて交流は急激に減少しており、逆に大学で全く関りが無いと答えた人は47人と高校と比べ約3倍にも増加し、49.0%にも上っている。47人のうち40人が一人暮らしであることから、主な理由として実家を離れると同時に今までの交流がなくなることが考えられる。さらに、「会う機会がない」「時間がない」「一緒に参加する友人や同世代がない」という理由から新たな交流も生まれにくい現状が明らかになった(図2)。

その一方で交流に興味があると答えた人は53人(55.3%)と半数以上おり、きっかけさえあれば交流を持つ可能性が高い(図3)。一人暮らしで挨拶以上の交流のある18人にそのきっかけについて尋ねると「ボランティアや学生団体」「祭りやイベント」が10人と最も多く、その2つが地域に参加する上で大きな役割を果たしていることが分かった(図4)。

学生が地域に入るために何が大切だと考えるか尋ねたところ、「魅力的なイベント」が28人(29.2%)、「一緒に参加する友人や同世代の存在」が26人(27.1%)とそれぞれ約3割を占めており、その2つを重要視していることが分かった(図5)。それらに加えて「SNSでの情報発信」や「気軽に立ち寄れる場所」といった要素があれば学生の交流を促進できる可能性は高いと言える。

3. ボランティアを通じた学生の地域参加

2章では学生が新たな交流を得るきっかけとしてボランティア活動が大きな可能性を秘めていることが分かった。そこでボランティアへの参加頻度と実際の交流との関係を見ると、参加頻度が高いほど実際の交流も活発であることが分かる(図6)。参加頻度を高めるには、学生が興味を持つような依頼を増やすことが重要であると想定し、やってみゅーでスクの依頼内容を分類し、依頼数とそれに対する充足率を出すことで、学生が何に興味を持っているのかについて分析する(図7)。

依頼件数は、「子供(見守りや学習支援)」に関する依頼が830件と群を抜いて多く、次に「文化(シンポジウムや国際交流,アート)」が295件、「障害者(交流・活動補助)」が198件と続き、それ以外は100件前後である。「子供」については充足率が30.6%と比較的高く、学生の関心も高いと言える。しかし「文化」や「障害者」の充足率はそれぞれ16.9%, 18.9%と低い。また「まちづくり(もちつきなど小規模なイベント)」や「奉仕活動(災害ボランティア, 清掃活動など)」、「祭り・イベント(港まつりなど大規模な祭りやイベント)」「スポーツ」は、充足率がそれぞれ34.8%, 31.6%, 25.5%, 24.7%と比較的高く学生の関心が高いと考えられるものの、依頼数は少ない。

また依頼元が自治会や町内会、まちづくり団体のものに絞ると、依頼件数は228件(11.6%)で、「まちづくり」や「祭り・イベント」、「子供」といった学生の関心が高い依頼が多い。地域から「まちづくり」や「祭り・イベント」の依頼を増やすことで、効果的に地域との交流を促進できると考えられる。

4. 地域の“空き”の活用を通じた地域交流

2015年5年に空き家特措法が制定される等、近年空

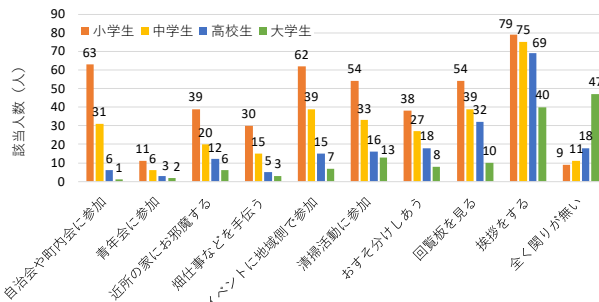


図1 小学校から現在に至るまでの交流の変化

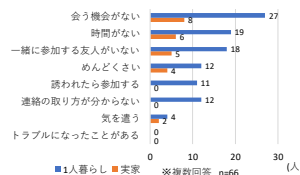


図2 地域交流が無い理由

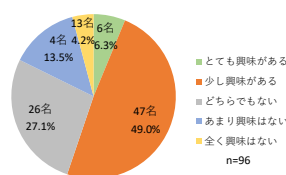


図3 地域交流に対する関心

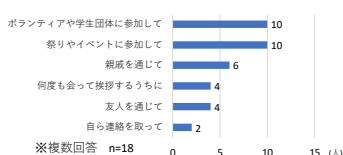


図4 交流を持つきっかけ

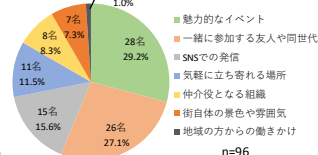


図5 地域に入る上で大切なこと

き家の増加が問題となっているが、その空き家を改修してコミュニティスペースとして活用し、学生と地域の交流促進を図る動きが全国的に見られる。

また、空き地も同様に活用を通して交流を生み出すとする動きが高まっており、国土交通省は2020年度、放置された空き地を適切に管理し、再利用・地域活性化に結び付ける「ランドバンク」のモデル事業に乗り出した。

この章では学生主体の活動事例に注目し分析する。

4-1. 全国の空き家・空き地の活用を通じた交流事例

学生主体で活動しており、インターネット上に詳細な情報が公開されている、空き家活用8団体、空き地活用4団体について調査したところ(表1, 表2)、改修後の空き家を主にシェアハウス(21/41件)やコミュニティスペース(13/41件)、空き地を畑(3/4)やコミュニティスペース(2/4)として学生サークルやNPO等の団体が運営しており、そこを中心に地域と協働でイベントを開いたり、地域住民が気軽に訪れて会話をを楽しむなど交流を深めていることが分かった。

事例の中で特に地域との交流が深かったのは福岡県糸島市の糸島空き家プロジェクトである。九州大学の学生によって構成される事務局が空き家の募集から改修、運営までを行っており、その費用や権利問題などを大学や九大OBによる社団法人がバックアップしている。また空き家募集の段階では糸島市が協力し、改修段階では地元工務店が指導を行ったり、地域の住民がワークショップ形式で手伝う等参加している。さらに改修後のカフェでは地域住民と協働で運営するなど、多角的・継続的に交流を行っている。また自治会で地域住民と空き家の改修計画や活用方法について意見交換を行うことで、地域に寄り添ったまちづくりを実現している。

長崎市中新町の「さかのうえん」は、中新町に住む女子大生が地域の空き地を畑として利用していか自治会長に相談し、2019年11月に始まった活動であり、2020年5月からはFacebookのグループを基本に活動しながらその様子を投稿している。グループには、2020年12月時点で学生5名と活動に賛同する社会人有志16名も参加しており、費用や技術、人脈といった部分で活動を支えている。自治会長夫婦は、活動当初から道具を貸し出したり隣接する公民館を休憩所として開くなど、協力的に参加している。また、活動に感化された自治会長の息子が同じ敷地内で畑を始めたり、畑の隣に住む住民が水やりを毎日するようになったりと、波及的に交流が広がっている。

4-2. 長崎の空き家・空き地活用を通じた交流事例

岩本氏は、大学院在学中の2014年6月から空き家を改修し、シェアハウスとして暮らしながら家の一角をオープンデーやイベントを行う場として開き、地域住民や学生が気軽に訪れる機会を創出している。また、岩本氏は地域の一員として自治会に参加したり地域の祭りの実行委員を務めながら、若者の目線で地域の魅力をSNSやメディアで発信し、学生と地域のハブとして両者の距離を調整する役割を担っている。さらに、2017年5月から約半年間かけて近くにある空き地を地域住民と共に「花広場」として再生し、現在はラジオ体操や地域の祭りなどの会場として活用している。岩本氏は「つくる」注2)を組織し、メンバーは6名で、内

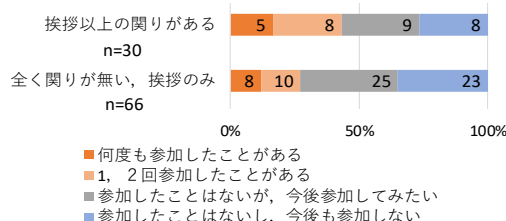


図6 ボランティア参加頻度と実際の交流との関係

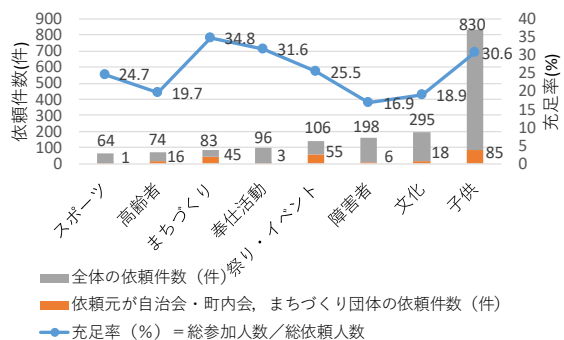


図7 分類別依頼数と学生の充足率

表1 全国の学生による空き家改修事例

プロジェクト名	活動拠点	発足年	学生人数	改修軒数	運営形態	改修物件を通じた主な交流
実験住宅まちな	佐賀県佐賀市	2010年	3	3	大学の研究室	最初の物件は2階がシェアハウス、1階がコミュニティスペースになっており、交流の中心となっている。
山形R不動産	山形県山形市	2008年	18	5	NPO法人	他に比べて地域交流は活況、不動産会社を通して賃貸物件として販売するなど事業色が強い。
0号館プロジェクト	群馬県高崎市	2014年	30	1	学生サークル	寮はオープンスペースとして開放し若者男女問わず利用しているが、貸し切りもでき、イベントを通じた交流も盛ん。
糸島空き家プロジェクト	福岡県糸島市	2011年	20	6	学生による事務局	文中で詳述
佐治倶楽部	兵庫県丹波市	2007年	4	4	会費制サークル(大人も入れる)	まちの商工会議所として利用されたり、小学生のフィールドワークの場にもなっている。
とよさと快楽プロジェクト	滋賀県彦根市	2004年	30	9	大学の学生支援プログラム	BARとして改修した物件では学生学生が運営し、地元住民とお酒を飲みながら語り合う場所となり、交流の中心となっている。全国6か所で開催していることが特徴的。中心の伊豆町ではシェアキッチンとして地元飲食店が出張展開するなどイベント会場として交流が行われている。
空き家改修プロジェクト	静岡県東伊豆町(他5地区)	2014年	70	9	学生サークル	
KGU空き家プロジェクト	神奈川県横浜須賀野市	2005年	30	4	学生サークル	留学生と地域の交流が盛んなのが特徴的である。

表2 全国の学生による空き地活用事例

プロジェクト名	活動拠点	発足年	メンバー	利用形態	運営形態	主な交流や協力関係
園がが	千葉県船橋市	2018年	学生10名	畑	サークル	若手大学や地元農家の助言や協力を得ながら畑の運営をし、実際に地元の卸売り業者などに販売している。
HELLO GARDEN	千葉県千葉市	2014年	学生4名 地域住民5名	畑・イベントスペース コミュニティスペース	まちづくり団体の企画	千葉大学の学生や卒業生、地域住民によって管理・運営されている。レンタルスペースとして様々なイベントが開かれたり、地域の祭りの会場になっているほか、本や雑貨の家の市スペース、レンタル菜園等もあり、多様な交流が生まれている。
市駅「グリーングリーン」プロジェクト	和歌山県和歌山市	2015年	学生11名 地域住民有志	イベント・コミュニティスペース	一般社団法人	地元まちづくり実行委員と大学の研究室が協力し、駅前スペースを活用した企画・運営を行う。キャンプやライブ、ビアガーデンなど様々なイベントでまちがいづくりに協力している。
さかのうえん	長崎県長崎市	2019年	学生5名 社会人16名	畑	任意団体	地域に住む女子大生が近くの空き地を畑として開拓した。活動について聞いた自治会長や社会人有志を筆頭に活動を拡大しており、おすそ分けや収穫祭をしたり、地元住民らしい場となっている。

3名が学生である。学生メンバーはいずれも町外に住んでいるが、「つくる」の活動を通して地域の祭りに参加したり、花広場に訪れるなど、継続的に地域の方との交流を深めている。

ヒアリングによると、学生メンバーは町の景色や雰囲気、気軽に立ち寄り自分のペースで過ごせるところに魅力を感じ、地域とは祭りやイベントの延長として適度な距離での交流を楽しんでいる。自治会などに入るのは荷が重いと感じており、地域とは適度な距離が必要だと考えている。対して地域住民は、学生には自治会に入り地域に根づくことを期待し、学生が4年間しかいないことについて懸念している。このことから多くの学生が地域に入るためには「気軽さ」が必要であることが分かる。地域は、学生が気軽に参加すること・出て行くことを受け入れる意識や雰囲気を全体でつくっていくことが重要である。

5. 学生と自治会との関り方

2020年7月から長崎県長崎市坂本町の山王自治会に加入し、月に1回程度班長会等に参加しながら、地域の現状や若者と地域との関わり方、コロナ流行の影響について調査した。

5-1. 坂本町と山王自治会の概要

坂本町は、JR浦上駅から東に徒歩10分ほどの距離に位置する斜面住宅地である。路地は非常に細く、斜面地で階段が続いている為バイクも侵入できないところが多く、高齢化や空き家の増加が進んでいる。しかしその一方で、長崎大学坂本キャンパスや大学病院が隣接しており、この地域に住む若者も少なくない。

丁別の人口構成(図8)を見ると、1丁目に関しては青年(15~34歳)の割合が35.8%と、長崎市全体の値(17.9%)より2倍ほど高い値となっており、高齢者(65歳以上)の割合は24.8%と長崎市の値(32.1%)と比べて低い値となっている。対して、2丁目、3丁目の青年の割合はそれぞれ18.0%、20.1%と長崎市の値(17.9%)とほぼ同じ値となっているが、高齢者の割合はそれぞれ36.7%、34.8%と長崎市の値(32.1%)よりも比較的高い値となっている。1丁目が市街地に近く比較的低地、2、3丁目が山手の斜面地であることから、標高の低い場所では若年層の割合が高く、標高の高い場所では高齢化が進んでいることが分かる。同程度の標高であるにも関わらず、2丁目と比べて3丁目の幼年・青年の割合が高く高齢者の割合が低いのは、3丁目に長崎大学坂本キャンパスや坂本小学校が隣接している為であると考えられる。

山王自治会は坂本1丁目、2丁目の世帯が加入しており、11月20日時点で全36班、250世帯である。自治会役員(会長、副会長、班長)の38名の内訳について見ると、70代が7名、60代が27名、50代が3名、40代が1名と、若い人が自治会運営にほとんど関わっていない。男女比について見ると、男性4名、女性34名と圧倒的に女性が多いことが分かる。

また山王自治会では、子供会や青年会は数年前まで存在していたが、少子高齢化により活動が無くなっている状況である。

5-2. コロナ禍における自治会の動き

コロナに対する対策や意識について、2020年11月5日に自治会長にヒアリングを行った。イベントや地域行事に関しては、会長自身は人数等の制限をかければはやっていいという考えであったが、「高齢者が多いため命に係わる」、「病院やサービス施設の利用者が多く、感染を広げる可能性が高い」といった声が多かったことから、年内に予定されていた行事(防災訓練、餅つき大会、旅行等)は全て中止という判断に至ったことである。さらに、看護学部の学生が公民館を訪問し健康体操を指導する「くすのき広場」は、10月を最後に閉会となった。流行が一時的に収まり、県内の感染者数がほとんどいない時期での判断であったため、地域全体として対策の意識が強いことが伺える。



写真1 さかのうえんメンバーと自治会長ご夫婦(右)



写真2 つくる邸で行われた地域の忘年会

自治会や班長会といった集会での対策としては、公民館の入り口にマスクやアルコールを置いたり、向かい合わせだった席の配置を1方向にそろえる、窓を常に開放する等の対策を行っていた。

また学生が担える事として、山王神社で毎年8月に行われる原爆慰霊祭の運営等の手伝いを提案したが、運営は役員だけで行い、参列も関係者のみに人数を制限するなど、極力人数を抑えていた。

5-3. “空き”の活用を通じた交流

4章の事例を参考に、坂本2丁目にある空き家「CRANE」と隣接する空き地(図9)を活用し、地域と学生の交流促進を図った(表4)。

CRANEでは2019年11月のOPEN後、ワークショップ等のイベントを行いながらSNSでの宣伝や自治会での周知を行っている。しかし、2019年11月に行った織物ワークショップ・作品展示イベントでの参加者は学生6名、社会人3名、2020年2月に行ったゲーム・映像鑑賞会では学生3名、社会人6名でいずれも町外からの参加で、地域住民の積極的な参加は見られず、自治会長や一部の住民が覗いたり少し話す程度にとどまっている。また、同年4月以降は主体となって地域を巻き込んだイベントはなく、インターネットやSNSを通じた外部からの予約・利用が多い結果となった(5月から11月で8件)。企画・運営を1人でやっていることや、コロナの影響により人の集まるイベントは憚られたことが原因として挙げられる。

空き地では、2020年5月に所有者である山王神社に交渉し、「手入れをしてもらえるのはありがたいし、自由に使っていていい」と了承を得たことで活動を開始し、5月から12月にかけて学生7名で草刈りや土づくり、野菜の植え付け等を行った。自治会で畑を始める旨を話したところ、近くに畑を持つ地域住民が道具を自由に使っていていいと使い方を指導したり、通りかかった住民と挨拶や会話を交わす等、交流のきっかけとして可能性を秘めていることが分かった。空き地は元々雑草が人の背丈ほど伸び、空き缶やごみが放棄されたり地域住民が早足で前を通ったりと治安悪化につながっていた為、畑をしていると「ありがとうね」「お疲れ様です」と声を掛けられることが多く、信頼やコミュニケーションにつながる事が分かった。

CRANEには足を踏み入れる地域住民は少なく、外から覗いたり声をかける程度にとどまっていたが、空き地では畑の部分まで立ち入ったり会話が発展しやすい傾向にあった。空き家は壁で閉じられた空間であり、利用には積極的に連絡を取ったり招待する必要がある

のに対して、空き地は誰からでも見える開かれた空間であることから、交流のきっかけとしては空き家より空き地の方が敷居が低いと考えられる。

6. まとめ

近年、少子高齢化や人口流出に加えインターネットの普及により若者と地域との関係の希薄化が進むことで、地域コミュニティの機能が失われつつある。実際に自治会に入ると運営を行っているのは70代、60代がほとんどで、青年会や子供会等も少子高齢化の影響を受け解散する状況となっていた。またコロナウイルス流行の影響は大きく、感染防止の意識が高いがゆえにイベントがほとんど中止になる等、若者だけでなく地域内での交流の機会が減っていた。

学生の地域との交流について、学生へのアンケート結果からは、学生は年齢が上がるごとに地域との交流

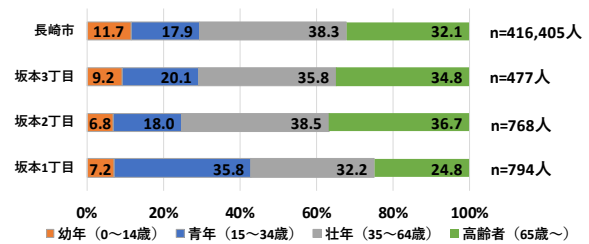


図8 坂本丁目別人口構成(令和元年)

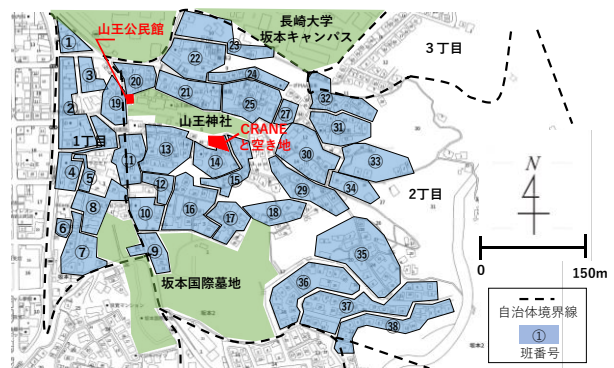


図9 山王自治会各班と主要施設の分布



写真3 山王自治会の様子

が少なくなり、特に大学進学と同時に交流が途切れ、「会う機会がない」「時間がない」「一緒に参加する友人や同世代がない」といった理由から新たな交流も生まれづらい現状が明らかになった。一方で交流に対する関心は高く、きっかけがあれば交流が生まれる可能性が高いと考えられる。交流を得るきっかけとしては、ボランティアやイベントが大きな可能性を秘めていることが分かったが、依頼数が少ないのが現状である。ヒアリングからは、町内活動に参加している学生は地域とは適度な距離が必要で自治会等に入るのは荷が重く感じており、地域側の期待とはすれ違っていることが分かった。学生が地域活動の一部を担うには、まず祭りや地域のイベント等、気軽に立ち寄り適度な距離感で交流を楽しめる機会を作り、それを発信して若者を受け入れる意識を地域全体で整えることが重要である。またそれには、地域との関係性を調整するハブ機能が有用であると思われる。空き地の活用は、開かれた場として気軽に挨拶や会話といったコミュニケーションが生まれやすく、地域の環境改善や信頼に繋がる可能性がある。空き家の活用は SNS での発信や積極的な働きかけが必要だが、地元企業や NPO 等多方面の協力の下で様々なイベントを開くことで、ハブとしての効果を発揮すると考えられる。

表 4 CRANE・空き地活動年表

年月	CRANE	空き地
2019年 11月	・改修完了 地域の方を招待しCRANEで飲み会 ・ワークショップ&作品展示	
12月	ワークショップ&作品展示	
2020年 2月	映像鑑賞・ゲーム大会	
5月	インターネットからのレンタル予約(1件)	空き地の所有者(山王神社)に利用交渉
6月	自治会で挨拶、空き家・空き地の活用について簡単に説明を行う。	・自治会で話したところ、地域住民が道具を自由に使っていいと倉庫を案内して下さる ・延べ学生3名、3日間で草刈り、がれきの除去、土づくり等を行う
7月	インターネットからのレンタル予約(3件)	
8月	ローカルメディアunmyaによる取材	
9月	自治会と「くすのき広場」に参加	
10月	インターネットからのレンタル予約(3件)	学生3名で草刈り、土づくりを行う。
11月	・自治会で、CRANEの認知度や今後の活用方法についてのアンケート配布(12月末回収予定) ・インターネットからのレンタル予約(1件)	学生4名で野菜の植え付け、費を解体して取り出した草を使ってマルチング
12月	年末演奏会&ワークショップ開催(予定)	



写真 4 道具の使い方を指導する地域の方

謝辞：研究を進めるにあたって、ヒアリングにご協力頂きました「つくる」メンバーの方々、並びに山手地区の皆様、そして山王自治会の皆様に深く御礼申し上げます。

この研究活動は、令和2年度前田記念工学振興財団の研究助成を受けて行った。

注釈

- 注1) 2007年に文部科学省指定「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に採択され、学生の自主的・社会的活動支援プログラム「やってみゅーでスク」事業を開始。4年間の財政支援が満了した後も長崎大学独自の事業として継続し今に至る。県内の他大学とも連携しながら、地域や各団体からのボランティアの依頼を募集し学生を紹介したり、ボランティア活動に関するセミナー等の活動を行っている。
- 注2) 岩本氏は、大学院在学中の2013年12月に、地域の価値を発見・発信することを目的として仲間と共に「斜面地・空き家活用団体つくる」(通称「つくる」)を設立。その後空き家に住み込みながら改修を行い、山手地区のまちづくりや、空き家の活用などを中心に活動している。
- 注3) 2018年10月から2019年11月にかけて、当時長崎大学大学院修士1年の鶴地氏が主導して空き家を改修したものであり、2020年4月から筆者が活動を引き継いでいる。細部の改修やワークショップ、アーティストの作品展示等を行いながら、レンタルスペースとしてインターネット上(space market)に掲載しており、活動の様子をInstagramに投稿している。

参考文献

- 1) 日本NPO学会、震災からの生活復興と民間支援に関する意識調査、2014年2月発表、<http://janpora.org/shinsaitokubetsuproject/20140227.pdf>
- 2) 清水陽子：大学生のコミュニティ参加に関する研究、2008年、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp51～52
- 3) 二神茉莉子：地域社会における大学生と地域住民の交流の可能性に関する研究—箕面市小野原を事例に—、2005年、日本建築学会近畿支部研究報告集、pp617～620
- 4) 長崎大学 ボランティア活動支援やってみゅーでスク 閲覧日：2019年11月
<http://yattemyudesk.matrix.jp/yattemyudesk/index.php>
- 5) 糸島空き家プロジェクトHP 閲覧日：2019年12月
<https://akipro2018.wixsite.com/itoshima-akipro>
- 6) 斜面地・空き家活用団体つくるHP 閲覧日：2020年1月
<https://www.tsukurutei.com/katsudou>
- 7) 令和元年 長崎市住民基本台帳に基づく町別5歳別人口
<https://www.city.nagasaki.lg.jp/syokai/750000/752000/p023438.html>